

あの森を訪ねて 第4回 芦ノ湖畔を歩く

ヒメシヤラ純林 杉並木、恩賜箱根公園、復元箱根関所



箱根神社裏山のヒメシヤラ林

はじめに

平家物語冒頭の「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色・・・」の沙羅に誘われて、箱根を北限とする赤褐色の木肌が美しいヒメシヤラ林を訪ねることにした。

コースは、誰でも知っている箱根の観光名所と重なるが、名所にあつて景観や歴史に深みをもたせている森林や樹木に視点をあてて歩いてみた。

具体的には、小田原駅—元箱根—箱根神社—神社裏山のヒメシヤラ純林—杉並木—恩賜箱根公園とヒメシヤラ林—復元箱根関所。

小田原駅から元箱根までは約1時間のバスの旅。

箱根神社のヒメシヤラ純林

まずは、箱根神社裏山のヒメシヤラ純林を見るために元箱根バス停から箱根神社へ向かう。

太く、高くそびえるスギの林立する間をゆく。まっすぐに天を指して伸びるスギの巨木は、あたりを圧倒し荘厳な雰囲気をかもしだしている。まさに神域に入る心地がする。

最初は、本殿下にある県の名木百選に選ばれた「矢立の杉」を見る。銘板には樹高35m、胸高周

囲6m、樹齢1200年（伝承）とある。周囲の杉より太く大きいのが、樹齢はそれほどの差があるとは思えない。根元に生えた苔の緑が鮮やかで美しい。

階段を上ると本殿。神妙に参拝したあとは、右手にある安産杉のそばの車道を上る。赤褐色の木肌がつややかで艶めかしくも見えるヒメシヤラの木が見えてくる。



点在するヒメシヤラの木を見ながら暫く行くと、杉林に入る手前に 昭和28年（1953）年こ「ヒメシヤラの純林」として県の天然記念物に指定した旨の看板がある。『ヒメシヤラはツバキ科に属し、箱根神社々殿裏傾斜地を覆う地域がヒメシヤラの純群落をなし、目通り直径最大67センチ、最小25センチ、平均31センチ。高さ18メートル前後のもの115本あり・・・。』

これは60年前の記録である

から、太さはともあれ枯れたものもあると思われるので現在の正確な本数は分からない。

下層はハコネダケがビッシリと生えている。林内に入ることはもとより天然に幼樹が生育する天然更新は困難な環境となっている。

看板のかたわらにひときわ艶やかな木肌の大木があるので太さを測ってみると胸高直径が62cmある。指定から60年経っていることと、これから行く恩賜箱根公園にある植栽から20年たったヒメシヤラ林の太さと比べると樹齢は100年を越しているようだ。



名前の由来

さて、ヒメシヤラの名前の由来だが、インドのクシナガラで釈迦が入滅する時四方に2本ずつあつたシヤラ（沙羅双樹）の木（日本では温室内でしか育たない）を日本ではナツツバキを釈迦入滅ゆかりのシヤラの木として植えられた。

ヒメシヤラは、ナツツバキより小さな白い花をつけるのでこの名が付けられた。ヒメは小さい、かわいらしいものを表わす時に用いられる。牧野植物図鑑にはヒメのつく植物が90種類ほどある。

来た道に戻り杉並木に向かう。

箱根の杉並木

今から200年前、江戸参府を終えて長崎に帰るシーボルトは、

昨夜来の風雨が治まった箱根路に入り、サンショウウオの黒焼売り等を見たりしながら杉並木を通り「みごとな糸杉の並木が箱根村の湖畔まで続いている」と江戸参府紀行に記している。



旧東海道筋に並木として植えられたのは松。しかし、箱根路は小田原から湯本までが松、湯本から畑宿までは松と杉、それより上には並木はなく、箱根の外輪山内側に入って杉が植えられた。

ところが、明治の末に宮ノ下から芦ノ湖間の新道建設のための費用捻出に1100本余が、また戦時中には松根油の採取等で畑宿から下は伐採されてしまった。

残った並木杉にも、先の大戦末期軍用船建造用にと供出要請があったのを拒否して守ったということ等を知ると、時代に翻弄されながらも林立する巨木がいとおしい。

杉並木と言えば、日光街道や例幣使街道の杉並木が思い起こされる。その延長は37km。世界最長の並木道となっている。

この杉並木は、徳川家康の近臣で大船駅近くにあった玉縄城2万石の初代藩主となった松平正綱と正信親子が寛永2年(1625)から20数年かけて植栽し、家康の33回忌にさいして日光東照宮に寄進したものである。

ここ箱根の杉並木も松平正綱によって元和5年(1619)に植えられたとも言われているが、現

在の樹齢が360年生ほどであるので、実際にはだいぶ後になって植えられたものらしい。

並木は4地区に分かれ、全部で400本余の並木杉がある。

なかでも、芦ノ湖に沿った500mほどが圧巻で、樹高30m、胸高直径1m程の杉の巨木が両側に続く。しかし、感嘆ばかりしてはられない。近年は環境の悪化で健康な並木杉は4割ほどのこと。このため、様々な保護対策がおこなわれている。未来への遺産として、ぜひ後世に残していただきたいと願わずにはいられない。

恩賜箱根公園とヒメシヤラ林

杉並木の終点は恩賜箱根公園の入口となる。この公園は、芦ノ湖に突き出た塔ヶ島に皇族の避暑と外国からの賓客のために造られた「箱根離宮」があった所である。

関東大震災や北伊豆地震により離宮が倒壊したが再建されることはなかった。戦後になって、神奈川県に下賜され、県立公園として整備され発足した。

平成4年(1992)には、再整備として離宮を模した湖畔展望館などが建てられるとともにヒメシヤラ林等も造成された。

展望館の2階から眺める湖と取り巻く森林の織り成す風景はすばらしい。晴れていれば、遠くに富士山を望むこともできる。



半島先端部にあるヒメシヤラ林は、植栽して20年。全部で60本ほどあり、太さは平均13cm

位で、神社裏山のものに比べると小さいが、林内にはハコネダケもなく明るく開け、ヒメシヤラの木々の姿や木肌の美しさをゆっくりと楽しむことができる。



離宮の眺めを堪能した後は、伝統的木造建築技術の粋を集め、歴史の再現を目指して、当時の姿に復元された箱根関所を見る。

昭和58年(1983)に江川文庫から発見された、慶応元年(1865)の解体修理の詳細な記録「相州御箱根関所修復出来高形帳」に基づき、寸法も当時のものを使用して復元され、平成19年に全面公開されている。

当然のことながら建物は総て木造で、その一部には西丹沢の県有林からヘリコプターで集材した木材も使われている。

外板は柿渋と松の煤を混ぜたもので塗られている。黒い建物や柵等が関所の堅固さと威厳をしめす。



水のほとりと森、そして歴史を刻んだ巨木の中を歩くと、DNAのなせる業か、なぜか心安らぐから不思議である。

(2012.10 瀧澤)